

中学生の部

最優秀賞	学校教材	霞ヶ関中学校	3年	神山 航河	2
優秀賞	あたりまえ	城南中学校	2年	増田 波奈	3
優秀賞	変わらないこと、変わることに	川越西中学校	3年	成島 恒	4
入選	コミュニケーションは宝物	川越第一中学校	3年	高柳 晴仁	5
入選	趣味を持つ理由	城南中学校	2年	島崎 葵唯	6
入選	汚名返上	城南中学校	3年	加藤 わかば	7
入選	個性の違い	砂中学校	1年	倉増 志穂	8
入選	ランドセルは海をこえて	砂中学校	1年	原田 姫夏	9
入選	その一票が「未来」を創る	大東西中学校	3年	鈴木 芽依	10
入選	心からのおもてなしをするために	大東西中学校	3年	中野 想士	11
入選	LRT	霞ヶ関中学校	3年	茂浦口 莉乃	12
入選	大切な人の死と向き合って	川越西中学校	2年	長野 優美	13
選評				14

◆最優秀賞◆

学校教材

霞ヶ関中学校

3年

かみやま こうが
神山 航河

僕は今、中学校三年生です。三年間中学校に通っていて思ったことがあります。「なぜこんなにも学校教材は重いのだろうか。」と。でも学校教材が重いと感じる人は、僕だけではないと思います。では、どうしていけば良いのかを僕の体験や考えをふまえて伝えたいと思います。

僕は小学校の入学時から、ランドセルがとても重いと思っていました。学年が上がるにつれて、学校教材は厚くそして重くなっていききました。また、学校教材の他にも、給食セットや週末になると体育着、給食着を持って帰らなくてはならず、いつもランドセルが壊れてしまいそうでした。それに加えて、小学校から家に帰るのに、約一・五キロメートルもあったので、夏の猛暑の中で重いランドセルを持ち、両手には、体育着や給食着を提げながら家に帰ることはとても苦しかったことを今でも覚えています。中学生になった今でも苦しそうに下校している小学生を見ると、大変だろうと思うことがあります。

中学生になったら、小学生の時とは比べ物にならないくらい教材が増えました。そのため、僕は中学二年生の時に腰痛を持つようになってしまいました。そんな時に僕は「学校教材の量を減らすためにはどうしたらよいのか」考えました。すると、二つの案が思い浮かびました。

一つ目は、「学校教材をすべて学校に置いて帰る」ということです。家庭学習をしないという意味ではありませんが、毎日の部活で疲れた後に十キログラム近い荷物を背負って帰るのは、大人の人でも苦しいはずですから、もし学校に教材をすべて置いて帰ることができたら、暑い夏の日でも、重い荷物を持って帰らずに済むということです。また僕と同様に家から学校まで

が遠い人でも苦しまずに下校できると思います。それに加えて、最近の小中高生を中心に身体検査を行ったところ、猫背の人が全体の四割いたことがインターネットで話題になっていました。僕は教材が重すぎるため、背負う時に前傾姿勢になることが原因の一つだと考えます。

二つ目は、「紙で作られている学校教材を県や市で全面的に廃止する。」というものです。一つ誤解してほしくないのは、全く勉強をしないという意味ではないということです。現在県内の大学や私立高校、私立中学などでは、授業の時にタブレットを使っています。僕はタブレット授業を普通の中学校でも行っていけば良いと思いました。僕がタブレット授業の方が良いと思っただのは、荷物が軽くて済むと思ったからだけではありません。

例えば、授業を行っている時に先生のパソコンと連動して一人ひとりの意見がクラスの人々と共有することができる点や、授業の時にわざわざシャープペンを持ってノートを写す必要がなく、授業の効率化を図ることができる、今よりも楽しんで学ぶことができると思えました。その他にも、数学の授業の時には自分の手で複雑な図形を動かして立体的に見ることができると、今より分かりやすい授業を行えると思えました。

タブレットを一人ひとりが持って授業を行っている様子を想像すると、どんな授業に変わるのかとてもワクワクしてきます。

今後、全国にタブレット授業の普及率が高くなっていったら良いと思います。

◆ 優秀賞 ◆

あたりまえ

城南中学校

2年

増田 波奈 ますだ はな

シリア、アフガニスタン、南スーダン。今あげた三つの国は、難民発生国のベスト三の国である。

私は先日、こんなニュースを耳にした。

「世界の難民・避難民が七百万人を突破。」このとき私は、この数がどんなに苦しい数なのかなど知ろうともしなかった。しかし、次の瞬間私の全身に衝撃が走った。

「これは国連調べで過去最多です。」

これまでの十三年間の人生で、難民に関するニュースはたくさん聞いてきた。その難民の数が更新してはいけない記録を、今、更新してしまったというのだ。

難民の実に五十二パーセントは、十八歳未満の子供だといわれている。私は日本で生まれ、育ち、あたりまえに学校へ通い、勉強をし、あたりまえにクラスメイトと給食を食べ、家族と食卓を囲み、夜になったら寝る。そんな生活をあたりまえのように繰り返してきた。その私のあたりまえは、難民の子供たちのあたりまえなのだろうか。

ある十歳の難民の女の子の夢は「学校の先生になること」。しかしこの子は、生まれてから一度も学校へ通ったことがないというのだ。ではなぜ学校の先生になりたいのか。その理由は、「私のような子をなくしたい」「私のような子にいろいろなことを私が教えてあげたい」ということだった。この子は往復二時間もかけ、毎日水をくみに行く。水を入れると十キログラム以上にもなるタンクを頭で支えて運ぶ。生きるのに欠かせない水。水道があり、そこから清潔な水が出る。それがあたりまえではないこと。私は改めて実感した。

そして、この子のような難民の子供たちが共通して願うことがある。

「未来を選択できる世界」

日本でこれを願う人はどのくらいいるのだろうか。このように未来について願う難民の人々。日本人の大半はきつとお金についてを願うのではないだろうか。

では、難民の人々、貧困に悩む人々のために私たちができることは何かないのだろうか。そんなとき、ある箱が私の目にとまった。

「アフリカの子供たちに給食を」

箱にはそう書いてあった。これでわかるだろう。私の目にとまった箱は、アフリカの子供たちに給食を届けるための募金箱であった。つまり、私たちが募金をすることで、日本で生まれ育った私たちのあたりまえを、貧困などで苦しむアフリカの子供たちに少しでも分けることができるのだ。それがどんなに素晴らしいことなのか。この問題を考え始めたときの私には、理解することは難しかっただろう。しかし今の私は違う。難民の子供たち、貧困で悩む人々にも、私の思うあたりまえを、胸を張ってあたりまえと言ってほしい。そして、家族や友達と笑顔で幸せな日々を送ってほしい。心からそう思える。私自身が難民の人々、貧困で苦しむ人々のために直接できることは少ないけれど、自分の問題として考え、身近なことから行動することで少しでも彼らの幸せに貢献していきたい。

変わらないこと、変わること

川越西中学校

3年

成島

恒

なりしま こう

認識は一樣ではありません。

例えば、「物事をよく吟味してから行動する人」だと周囲の人に思われている人がいたとして、全ての人からそのように認識してもらえないでしょうか。きつと「優柔不断な人」のように認識する人もいると思います。その人の「よく考えている」ところを見るか「決断が遅い」ところを見るかによって結論は変わるからです。「人に何を言われても動じない人」は、「頑固な人」ともられることもあるでしょう。「悪口などを言われても気にしない」ところをみるか「アドバイスを聞き入れない」ようなところを見るかで変わるからです。ではこれらの人に対するそれぞれ二つ挙げた認識のされ方のうちで、どちらか一方が間違っているといえるでしょうか。逆にどちらか一方だけが正しいといえるでしょうか。どちらもいえないと思います。

なぜなら、これらの認識はどちらも正しいからです。人はその人自身の見たり聞いたりした事実に基づいて認識をつくるため、客観的に見れば、「こちらが正しい」「こちらが正しくない」と言うことは本来できないと思います。

つまり人が人物や物事に対して持った認識は、しっかりとした思考のプロセスを経て構築されたものであれば「全て正しい」のです。しかし、それは同時に「全て正しくない」ということでもあります。どういうことかということ、一つの物事に対して「正しい」という認識と「正しくない」という認識が生まれる可能性があり、そのどちらか否定することはできないということです。別の言葉に置き換えてもこのことが言えます。ある人が「くだらない」と感じることも、別の人にしてみれば、「くだらなくない」と感じるでしょう。相反する二つの認識が、一つの物について共存することができます。物事は「全て正しく、全て正しくない」と言えるのです。

そのような世の中で大切なことは、何かを信じていることです。何かを信じていることは、自分の意見を持つということでもありません。自分の信じていることがなければ、自分の行動における一貫性や目的意識が薄れてしまいますし、様々な考え方が存在するこの世界で流されずに生きることもできなくなってしまう。多様な認識があるからこそ、それを知った上で何か一つ信じていることが重要だと思います。

しかし、自分の意見だけに固執して他人の意見を無視してはいけません。争いごとを生んでしまうからです。認識や意見とは、決して不変のものではなく、自然に変化していくものです。ときに柔軟に他者の意見も取り入れつつ、はつきりとした自分の意見や認識を持つことで、客観的な立場からでも他者と共存しながら生きていくことができます。

だから私たちは、生きている間常に考え続けなければいけません。認識を構築するとき、他人の認識を知ろうとするとき、その後で自分の信じるものを見つけないとき、そして見つけてからも、考え続けることは、認識や意見より良い方向へと変化させていく行為だからです。

他者との関わりあい、共存のなかで、他者との認識の違いを受け入れ、自分の中で生かしていく、反映させていくこと。これこそが平和な時代を築くために必要不可欠なことであって、人類が忘れてはならないことの一つなのではないでしょうか。

そしてこれらのことの根本にあるもの――。

『全て正しく、全て正しくない』

これが、諸行無常とも言われるこの世界で、絶対に変わることのない真理のうちの一つであると、僕は信じています。

◆ 入 選 ◆

コミュニケーションは宝物

川越第一中学校

3年 高柳

晴仁

たかなぎ はると

僕にはまだはつきりとした自分の将来の理想像というものがありません。そこで、自分に合っている職業は何かと考えていたときにふとこのような記事を見ました。それは「今後十年から二十年でアメリカの雇用者全体の四十七パーセントの仕事が人工知能によって自動化されてしまう」というものです。そのうえ日本でも同様のリスクが四十九パーセントもあるそうなのです。人工知能とは、推論・学習など人間の知能の働きに近い能力を持たせようとするものです。つまり、簡潔に言ってしまうと、人工的に作った知能ということになります。僕はタブレットなどを介して人工知能にはとてもお世話になっていきます。僕だけでなく、家族も、友人も、おそらく全世界の多くの人が人工知能を使ったことがあるでしょう。

では、先ほどの記事に話を戻して、なぜそのようなことが起こってしまうのかを考えてみましょう。その記事の続きにこう書いてありました。一つは膨大なデータを人工知能が素早く処理できるからです。確かに、統計学の分野などでは活躍するかもしれません。二つ目に挙げられていたのはセンサー技術が発達したからというもの。例えば警備の面では、個人の集中力などによらず人工知能は監視し続けることができます。三つ目として、一つの素早いデータ解析能力と二つ目のセンサー技術を兼ね備えることによつて行うことのできる判断があるからと挙げられています。声というセンサーを受け取って蓄積されたデータの中から適切な答えを導き出し、それをまた声に変換し答える、そのようなことができる人工知能に僕ら人間は感謝しなければならぬと思います。そこで、スマートスピーカーに「いつもありがとう」と言うとき瞬きする間もなく「どういたしまして」と謙虚に答えてくれました。なんと良くできた機械なのか、いや、もう機械ではない「ヒト」

のような気がしてきました。何にせよ、現代社会で人工知能が僕たちの生活を支えているのは間違いないといってもいいでしょう。

では、また記事の方に話題を戻して、その記事の後ろの方に書かれていた言葉を紹介したいと思います。それは「人と人がコミュニケーションを取らなければならぬ仕事も人工知能にとつて代わられる」というものです。辞書でコミュニケーションという言葉調べると「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」と書いてありました。僕はこの辞書中の「人間の」という言葉を強調したいと思います。別にこの記事を書いた人を否定するわけではありません。コミュニケーションという行為を人工知能がしてくれると考えるのは世の中がおかしいと思います。先ほどの僕と人工知能との会話のようにコミュニケーションを取ることもできません。しかし、この世の中から人と人とのコミュニケーションが無くなってしまうたらどうなるでしょうか。家に帰ってきて「ただいま」と話しかける相手が小さな機械で、「お誕生日おめでとう」と祝ってくれるのも小型のマシンで、といったそのような生活に笑顔が見られるとは僕は思いません。人と人のコミュニケーションを取ろうとするのではなく自然と取ってしまう、そのような今みたいな時代が続いてほしい、それが僕の願いです。

最後に、改めて、全世界の人に、人と人とのコミュニケーションを大切にしたいと思います。僕も人と人とのその瞬間にしかできないコミュニケーションを尊いものと考えて、相手とのコミュニケーションを無意識に取るようになりたいと思います。

人工知能が人と人とのコミュニケーションを無くしてしまう恐れのある時代、そんな時代だからこそコミュニケーションは宝物なのです。

趣味を持つ理由

城南中学校

2年

島崎

葵唯

しまぎき

あおい

私は前に、趣味はあるかと聞かれたことがあります。その時ふと思いました。

「趣味は人にとって大切なものなのか」と。何のために人は趣味を作り、持つのでしょうか。

今もですが、昔から人々は趣味を見つけ、持っていたと思います。しかし、人々の中には趣味を持たずに生活をしている人もいます。ですが、私は趣味を持って生活している人たちに対して、疑問をいただきました。趣味を持って生活をしている人たちはなぜ、どのような理由から趣味を持ちはじめたのが、気になりました。

私は、人が趣味を持つ理由が三つあると思います。

一つは、生活するために趣味を持つ人です。趣味を持つことによって、人間関係が広がり、仕事などで役に立ち、話題が豊富になり、色々な人と会話で交流することができず。また、生活リズムを整えることができ、趣味を必要とする人もいます。

二つ目は、自分の気持ちのためにしている人です。

例えば、生きがいが増える、ストレス解消になるなどです。特に多いと思うのは、ストレス解消をするために趣味を持っている人です。人は生きていればだれもがストレスを感じることもあると思います。ですが、趣味を持つことによって、心の中にたまっている色々な感情を少しずつ解消させることができます。趣味が生きがいになる人もいます。趣味を持つということは、老若男女とわずでできることです。

三つ目は、ためしにやってみたら楽しく、趣味になった人です。友達や、家族にすすめられ、少しためしてみます。すると思っていたよりも楽しくて、続けているあいだに趣味と言えるようになることもあるでしょう。ほかの二つとは少し違う考えですが、私はこれもしっかりと理由だと思っています。

このように少し考えるだけで、いくつもの考えがでてきます。ですが、私とは、別の考えという人も、世界にはたくさんいると思います。私達が今ずんでいるこの世界には、人と話すときに何を話せばいいのかわからない人や、ストレスを感じやすい人、生活リズムを整えるのが苦手な人がいます。また、人間関係を広げることがむずかしい人、生きがいが無くつらい人、ほかに色々な悩みを持っている皆さんに、「趣味」というすばらしいもの、そして心がやすまる場所を作ってほしいと思います。子供の頃からの趣味がある人は、これからも続けてほしいし、さらに少し気分を変えて違うことにも挑戦してほしいと思います。まだ趣味を持っていない人は、今からでも遅くないので、少しずつ色々なことに、挑戦してほしいと思います。今よりもたくさんの人に趣味を持ってほしいと思います。

私は今中学生です。今の私の趣味は、お菓子を作ること、レシピを見ること、マンガを読むことです。私はお菓子を作っているときは、ほかのことを考えずに楽しくリラックスすることができ時間です。マンガやレシピを見ている間は、字に集中することができ、読むことによって、友達との会話を増やすことができます。これから大人になるにつれて、趣味が変わってくるかもしれないけれど、今を楽しんでいる出にするために、今ある趣味を大切にしていきたいです。三年生になれば受験もあります。もっと大変になってつらい時がたくさんあると思います。その時こそ私は、お菓子作りをして、作ったものを食べて、自分の趣味をいかしてがんばってあげたいなと思っています。私は、世界中の人に趣味を持って幸せに生活してほしいと思います。

◆ 入 選 ◆

汚名返上

城南中学校

3年

加藤 かとう

わかば

日本、それは食品ロス大国である。

日本が今、世界からそう言われているのをあなたは知っているだろうか。これは、食に感謝する文化のある日本にとって、恥ずべき汚名である。

何故その名が付いたのか。それは日本の食料自給率の低さと食料廃棄率の高さにある。日本は食料自給率が三十七パーセントと低いのに対し、廃棄量は年間約二百八十二万トン。一人あたり約二十二キログラムと世界一位である。食料をわざわざ輸入したにも関わらず、それを捨てているのだ。誰もが無駄だと思わざるを得ないこの現状では、食品ロス大国と呼ばれるのも頷けるだろう。では、どうしてこんなに食料廃棄量が多いのか。その理由を二つ挙げよう。

一つ目は、食品を売る際の三分の一ルールと呼ばれる慣習だ。これは製造日から賞味期限までの間を三分割し、三分の一の時点までを納入期間、三分の二の時点までを販売期間とするものである。例えば賞味期間が六カ月ある場合、製造日から二カ月以内に納品、四カ月以内に販売しなければ、消費者の手に届くことはない。販売期間が終了した時点では賞味期限まで二カ月もあるのに、廃棄されてしまうのだ。

このルールは、日本人の食の安全への意識が高いことからできてしまったと考えられる。日本人は賞味期限に敏感だ。賞味期限を過ぎたものは不安で食べたくないと言う人もいるし、スーパーなどで食品を買う際、棚の奥の商品を出して他のものと期限を比べる人も多いのではないだろうか。本来、賞味期限は味を保証する期間であり、消費期限までは過ぎてても害はない。それなのに、賞味期限を過ぎたものをすぐに捨ててしまう家庭もあるのだ。これでは食品ロスは無くならないだろう。

二つ目は、SNSの普及に伴う写真撮影の増加だ。数年前、流行語にも選

ばれた「インスタ映え」という言葉は、誰もが知っているだろう。今、この「インスタ映え」を意識する女子中高生や、それを対象とした店が増加している。カラフルに彩った食べ物やSNSを中心に話題となり、瞬く間に行列を作るのだ。しかしその行列は、「食べてみたい」という純粋な思いを持つ人だけで作られるわけではない。最近では、写真に撮ることを目的として買ったものを食べずに廃棄する人が増えているのだ。

これはごく一部の人であり、インスタグラムなどを悪いとは思わないが、写真のためだけに食料を無駄にするのはいかなるものか。インターネットが主流となった今、食品ロス軽減のために解決するべき問題だろう。

今挙げた二つの理由には、共通点がある。それは、食へ感謝する気持ちが薄れていることだ。しかし、日本はもともと、食への感謝の気持ちが大きい国だ。その一例が「いただきます」という言葉である。普段からよく耳にしている。日本では当たり前のように使われるが、この文化は日本にしかないと言われている。食事の前に決まった言葉を使う文化はあるものの、日本と同じ「いただきます」という意味を持つ外国語はないのだ。そのことから、世界では「いただきます」が広まりつつある。これは、日本にとって誇らしいことであり、食への気持ちの大きさを意味している。そんな日本だからこそ、食品ロス大国とは食への感謝が無くなったことを意味する汚名なのだ。

世界では、食品ロス削減のための様々な取り組みが行われており、日本の企業でも対策が行われ始めている。最近では、SNSのために大量に食べ残した客を出入り禁止にするニュースもあった。世界中で食への意識が変わってきているのなら、次は個人の意識を変えなければならないだろう。もう一度食への感謝を思い出し、食品ロス削減のために何ができるのか考えることが大切だ。今こそ、汚名を返上するときである。

個性の違い

砂中学校

1年

倉増 くらます志穂 しほ

私は今、メダカ・カメ・ザリガニを飼っています。この三種の生き物を観察していると、それぞれ違う行動をします。

メダカは人が近くにいると水草のかげに隠れて、離れると自由に泳ぎ回ります。えさをあげると、すぐに食べに来ます。水中で呼吸するためにえらがあり、泳ぐためにひれがついています。

カメは人が近くにいるとじっと固まっていて、離れると逃げ出そうとしてよく動きます。えさをあげると近くに來てすぐに食べてしまいます。堅い甲羅の中に頭や足を隠して、身を守っています。

ザリガニは人が近くにいるとすぐ後ろに下がって隠れて、離れると砂を動かして自分の好きな様に隠れ家を作ったり、つぼの中に入ったりと自由に動き回ります。えさをあげると、自分の近くにえさをキープしてゆっくりと食べます。左右二本のはさみでえさや砂を持ったり、敵がきた時にははさみを広げて体を大きく見せて威嚇します。

このように、同じように水の中で生活している生き物にも個性や特徴があります。それぞれ違うけれど、私はみんな好きです。

それは人間も同じです。人間にも一人一人の個性があり、特徴があるので。「周りの人には出来ることが自分はなぜ上手く出来ないのだろう。」とか、「どうしてなかなか速く出来るようにならないのだろうか。」など、誰でも一回は思ったことがあるはずですよ。それに対して「これなら簡単に出来る」というものもあると思います。それが個性なのです。だから、自分が出来るからといって、出来ない人をからかったりするのは良くないです。きつと出来ていない人も自分なりに努力をし、がんばっています。

だから、そのような時には、私はわかりやすくコツを教えてあげたり、一緒に練習して手伝ってあげたりしたいと思います。「情けは人のためならず」という言葉があります。これは「親切にすると、相手だけでなく自分にもよ

い結果が返ってくる」という意味です。もし自分が出来ないことがあって困っている時は、周りの人もきつと教えてくれたり一緒に手伝ってくれたりすると思います。

人によつて運動や芸術や勉強などで得意、不得意は必ずあります。得意なことはどんどん続けてやる事が出来るので、趣味になることもあります。しかし、不得意なことはやりたくないから逃げてしまい、きらいになつてしまいます。けれど、きらいだからといって逃げてばかりではダメで、努力をすればそのうち出来るようになって、趣味が増えていくかもしれません。だから、いろいろチャレンジしてみる事が大切だと思います。

人の見た目についても、かみの毛の質感、目鼻口の大きさ、背の高さなど人によつて違いがありますが、背が低いことや、目鼻口が大きい・小さいなどのことからかかうことは良くないと思います。それが人それぞれの特徴だからです。見た目は生まれた時からのもので変えることが出来ないから、見た目について悪口を言うのはいけないことです。また、外国の人などかみの毛の色や肌の色が違うからといって、見た目だけで判断するのも良くないです。みんな同じ顔をして同じ身長で過ごしていたら、少しこわいと思うはずですよ。同じ親から生まれた兄弟や姉妹にさえ、顔や性格など必ず違いがあります。みんなが違うからこそ、それぞれの人の魅力がわかるのだと思います。

生き物にも人間にも、それぞれの個性や特徴があります。だから、その個性や特徴を大切にし、自分のことを好きになり、周りの人の良いところをたくさん見つけていきたいです。

◆ 入 選 ◆

ランドセルは海をこえて

砂中学校

1年

原田 ちはら
姫夏 ひいな

みなさんは、「ネパール」という国を知っていますか？

ネパールという国は、国内産業の発達不足が原因で四十九パーセントの子供が低体重児、また、五歳未満の小児六十三パーセントが栄養失調なのです。電気も水もガスも通っていないため、アジアで最も貧しい国といわれています。また、ネパールの子供達は、学校に行けなかったり、行くのに数時間もかかったりするそうです。

私は今までネパールという国を知らず、全く興味を持っていませんでした。しかし、ある記事を見てネパールに興味を持つようになりました。

「ネパールの子らにランドセルを」

ある日、こんな記事が目に入ってきました。これは、登山家の野口健さんが呼びかけている活動でした。

家には姉、私、妹の三つのランドセルがありました。私が卒業するころにもランドセルはこわれていないし、人の役に立っているのであれば送ってもいいと考えていました。そこで、インターネットを使って調べたところ、これまでに数百個ものランドセルをたくさんの方や村に送っていることが分かりました。その送ったランドセルの中には、兄弟などに引き継がれ十年以上も使われている物もあるそうです。

私は、ネパールの子供達のつらい過酷な日々を少しでも楽に、楽しく過ごしてもらいたい、私達の協力でネパールの子供達の将来への心配がなくなり、夢がかなうのであれば絶対参加したい、と思いランドセルを送りました。できるのであれば食べ物だって、水だって、もつともつとたくさん物を送っ

てあげたい。世界を平等にしたい。そう思いました。

「勉強したい。」「勉強をもっと頑張りたい。」という子供達に、自分のランドセルを使ってもらえる。私達の協力が世界の子供達の支えになる、と考えたとワクワク、ドキドキしてうれしくなります。今、海を渡っているであろう私達のランドセルの先には、輝かしい未来が待っています。

今回、私がランドセルを送ったネパール以外の国や村にも、苦しい生活をしているところは少なくはありません。つまり、まだまだ私達の協力、助け合いが必要になるのです。世の中たくさんの活動が行われていますが、その活動に対し、「自分は関係ない。」「するのが面倒くさい。」ではなく、一度確認し、興味を持つてみるのが大切なのだと思えます。

私達の学校では、福祉委員会を中心に、エコキャップ回収の取り組みや募金活動などの誰でも簡単に参加できる活動が行われています。その身近に行われているたくさんの方の活動に私をふくめ多くの人たちが参加し合っていて、世界中に広まれば今よりもよりよい世の中を目指していけると思っています。そして、新しい自分と、新しい世界、未来に出会えるはずですよ。

私は今回の「ネパールの子らにランドセルを」という記事をきっかけに、もつともつとたくさんの方の国の事を知り、何か人の力になっていきたいと改めて思いました。

そのために私は、身近にある活動に積極的に取り組み、よりよいものにしていきたいと思います。

その一票が「未来」を創る

大東西中学校

3年

鈴木 芽依
すずき めい

戦前、男女差別や年齢制限により、投票に行けない人が多くいたことを世の中は知っているだろうか。今の日本では、十八歳になると、自動的に選挙権が与えられる。選挙は、日本人として政治に参加する上で、最も身近なものであると思う。近年、政治への関心が低下しているのは、なぜだろうか。

先日、参議院選挙が行われた。私は新聞に載っていた投票率を見て、目を見張った。なんと、投票率は五十パーセントを下回っていた。頭の中に、ハテナマークが浮かび上がった。なぜ、政治に参加できるチャンスを、自らの選択肢の中から消してしまうのだろうか。また、私は選挙特集をしているテレビ放送の中で、ある若者の発言に不満を持った。

「どうせ、私が一票入れても変わらないし。」

心からがっかりした。私は、まだ選挙権を持っていないが、十八歳になったら政治に参加できる数少ない機会を大切にしたい。では、どうしたら、若者達の投票率は上がるのだろうか。

私は、まず政治に対する関心を高くすることが最重要課題だと思う。そのためには、政府と若者の距離をもっと近くしなくてはいけない。政治イコール固く難しいという固定観念を崩し、どの世代にも柔軟に対応できる力が大切なのではないだろうか。

なぜ、若者の政治への扉は開かれないのだろうか。今はSNSを通じ、情報を詳しく知ることができるにも関わらず、若者の関心の低さが目立つと感じる。

そんな中で、私たち中学生は今、何をしていたらよいのだろうか。それは、世の中で起こる小さな変化を感じることで私は考える。一見、私たちの生活と政治は離れているように見える。だが、暮らす、生きるということ自体が政治なのだと思う。生活していく中での疑問を共有し、解決するため

に話し合う。そのリーダーが政治家であり、メンバーは国民の私たちなのだ。もっと気軽な気持ちで政治に親しみたい。

私の感じ方だが、年の離れた人よりも、近い人の方が親近感を持ちやすく、意見が似る傾向がある。若者に興味を持ってもらうには、若者が議員になり、政治の第一線で活躍すればいいのだ。どうすれば、若手政治家は誕生できるのだろうか。例えば、政府が出馬の費用を全額負担し、議席に二十五歳未満の政界志望の学生枠を作ったらどうか。もし、私の友達が選挙に出るとなったら、演説を見に行ったり、政党について詳しく勉強したりと思う。

同じ人が、長期間政権を握っていては、変化や刺激は少なくなりがちだ。若者らしい考えで、国に新しい風を吹き込ませることも必要だ。同世代の活躍を見れば、関心も高まるはずだ。だが、ここで終わってはいけない。それはあくまで、その人や党の方針であり、その後が最も重要だ。言動、政策をもとに自分のこととして考えを伝える努力を怠ってはいけない。胸に留めているだけでは届かない、そして変化を望むこともできない。そのためにも、世代、男女関係なく自らの意見を気軽に発信できる場所が必要だ。国民が発信し、政治が受けとる。政治が発信し、国民が受けとり、実行できる。このサイクルが、止まることなく、回り続けていることが、理想的な民主主義国家の姿だと思う。

「将来の日本はどうなるのだろうか。」こんな疑問の声を耳にすることがある。しかし、将来は、自らの手で創っていくものだ。何が起こるのか分からない、不意にやってくるようなものではない。お互いに支え合い、協力し、認め合うことで、自分の求める理想に近づくとと思う。私は誓う。

「素晴らしい未来を創る一票を、決して無駄にしない」と。

◆ 入 選 ◆

心からのおもてなしをするために 大東西中学校 3年 中野 想士なかの そうし

東京オリンピックまで一年を切った。我が街川越でもゴルフ競技が開催される。しかし、世界最大級のスポーツの祭典が日本で開催されるにあたって、日本人は多くの海外から来るお客様を受け入れることができるだろうか。

もちろん、宿泊施設が足りないことも解決しなければならない問題だ。しかし私は、東京オリンピック招致が決まった時に流行語となった心からの「おもてなし」ができるのかという問題を指摘する。川越で行われるゴルフ競技に参加する選手と、川越に来る観客の人々に「おもてなし」を感じて帰ってもらうために何が必要だろうか。

まずは、海外選手へのおもてなしだ。川越市で行われるゴルフ競技は、数ある競技の中でも有数の、紫外線を多く受けるスポーツだ。それほどの日差しのもとでプレーしていると、当然熱中症の心配がある。だから、選手の方々に、服の中に風を送る空調服（ファン付ウェア）というものを配布し、快適にプレーしてもらうことを提案する。また、スポーツドリンクも配り、選手の水分補給を促す必要もあると考える。そして何より、私たちができることは、選手のプレー中に不必要な言葉がけをせず、試合に集中していただくことだと思ふ。

次に、海外から来る観光客のみなさんに、楽しんで快適に観戦してもらうための配慮が必要だと考える。まずは、選手同様暑さ対策は緊急の課題だ。そこで僕が提案するのは、JAPAN熱中症対策セットを配布するという案だ。JAPAN熱中症対策セットとは、塩アメやスポーツドリンク、うちわ

などを配布するというものだ。また、安心して観戦するために、警察官を増員するという治安対策も必要だ。

しかし、どの案も費用がかかってしまう。そこで、最寄り駅や競技会場の周辺でお土産を買ってもらったり、飲食をしてもらったりするという案はどうだろうか。ゴルフは注目競技であるため、多くの人々が訪れると予想される。しかし、残念ながら、最寄り駅のJR笠幡駅や南大塚駅周辺と、競技会場の霞ヶ関カンツリー倶楽部の周辺に、消費してもらえない場所がほとんどない。そこで、商店街の店が入っている商業会などが、空き地や空き店舗等を活用して、川越や埼玉の特産品、郷土料理を販売する。そうすることで、消費を促し、川越や埼玉を世界にアピールすることができるので良いと考える。観戦中も観戦後も楽しめる川越であってほしいと思ふ。

東京オリンピックまで一年を切った。オリンピックは普段は経験することのできない、国際交流をするチャンスだ。そして、オリンピック期間中は、海外の方々から質問を受けることがあるかもしれない。そのような時に、自分たちができることとして一人ひとりがどう日本の「おもてなし」をできるか、考える必要があると思ふ。そして僕は海外の人に安心して楽しい時間を過ごしてもらうことが「おもてなし」だと考える。オリンピックまでに、自分ができるかを考え、全力で「おもてなし」をしたい。そして、今回提案したアイデアを検討していただき、よりオリンピックが良いものにしてほしいと思ふ。

L R T

霞ヶ関中学校

3年

茂浦口

莉乃

もうらぐち

りの

みなさんは「LRT」というものを知っていますか。「LRT」というのは、ライトレールトレインの略で次世代型路面電車のことです。この「LRT」はヨーロッパの多くの都市では既に導入されています。日本でも少しずつ知られてきていますが、まだいくつかの市でしか導入されていません。私は、この「LRT」を日本各地に新しい公共交通機関として広めていくべきだと思います。その理由は二つあります。

一つ目は、他の乗り物に比べて二酸化炭素の排出量が少ないからです。「LRT」が乗客一人を一キロメートル運ぶのに排出される二酸化炭素の量は、自家用車の場合の約半分となっています。また、走行時の二酸化炭素排出量のみならず、車両の製造や維持管理、レール・道路などの製造や維持管理による排出量も、自家用車などの他の乗り物と比べて少なくなっています。二酸化炭素が増えると赤外線吸収量が増えてしまい、温室効果ガスの増加につながります。温室効果ガスが増えると、地表からの太陽の熱が放出されにくくなり、地球に熱がこもった状態になってしまいます。これが「地球温暖化」です。そのため、二酸化炭素の排出量が増加すれば地球温暖化は進んでしまいます。逆に言えば、二酸化炭素の排出量を少なくすれば、地球温暖化が進むのを防ぐことができます。

二つ目は、高齢者ドライバーによる事故を減らすことができると思うからです。事故を起こしてしまった高齢者ドライバーの多くは、自動車以外の交通機関が不便で自動車が便利なので、高齢になっても自動車の運転を続けてしまい、事故を起こしてしまいます。高齢者ドライバーの中には、そのよう

な痛ましい事故が起きているということを知り、免許を返納している人もたくさんいます。しかし、免許を返納したくても住んでいる地域の公共交通機関が発達していないため、しかたなく自動車を運転している人もいます。そのような人たちにとって、「LRT」はとても便利なものになると思います。

なぜかという点、「LRT」は電車などよりも狭い間隔で乗り場を設置できるため、自分の家の近くにある乗り場から利用することができからです。「LRT」を利用すれば、近くのスーパーマーケットなどに買い物に行くのはもちろんのこと、電車に乗るために駅まで行ったり、バスに乗るためにバス停まで行ったりと、遠くに行くことも自動車を使わずに可能になります。また、今「LRT」を導入している地域の多くではシニア割引で高齢者の料金がお得になったり、高齢者は無料というサービスをやっていたりと、高齢者が気軽に乗車できるようなことを行っています。自動車を利用するよりも安く安全なため、「LRT」を導入している地域に住んでいる高齢者の多くは、自動車ではなく「LRT」を普段の生活に利用しているようです。

地球温暖化が進むのを防ぎ、高齢者の新たな交通機関になることのできる「LRT」は環境にも人にも優しいため、地球温暖化の問題や高齢化の問題を解決できるようなたくさんの方々の要素を含んでいます。その一方で、大規模な工事や多くの予算が必要ななど、いくつかの課題も含んでいます。そのため、私は今述べたような課題を解決し、新しい公共交通機関として「LRT」が日本各地に広がっていくと良いと思います。

◆ 入 選 ◆

大切な人の死と向き合つて

川越西中学校

2年

ながの
長野 優美
ゆうび

私にとって初めての経験である身近な存在の人の死。それは突然の事でした。

五月一日、令和を迎えた朝。静かな家の中に電話の音が鳴り響きました。その電話は秋田県に住む祖母からで、前日の夜に曾祖母が亡くなったというものでした。

「ひいおばあちゃんが亡くなったって。」
電話を終えた母がそう言った時、私は驚きを隠せませんでした。曾祖母は八十六歳でしたがとても元気で、家族で秋田県に遊びに行った際にはいろいろな話をしてくれていました。そんな曾祖母が急に亡くなってしまふなんて全く信じられませんでした。

私は今まで身内が亡くなるという経験をしたことが無かったので実感がわかず、心に穴が空いたような感じでした。私が産まれた時には秋田県からかけつけてくれて、いつも笑顔で接してくれた、私はそんな曾祖母が大好きでした。亡くなってから日にちが経った今でもあまり実感がわかないのは変わらず、秋田県に行けばまた会えるような不思議な感覚になっています。

曾祖母は数年前から認知症になっていました。一日に何度も同じ質問をしたり、人の名前を忘れてしまったりすることが多くありました。私も名前を忘れられた時は悲しくて、

「なんで覚えてられないの。」
と思ってしまうました。でも今思うと一緒に話せていただけでも幸せなことだったのだな、とすごく反省しています。いなくなってしまうから改めて

曾祖母が私にとって大切な存在だったことを痛感しました。大切なものは失ってから気付く、というのはこのようなことを言うのだろうな、と思いました。

私は小学六年生の冬以降、約一年半秋田に行けていません。今年の夏も行くことができず、曾祖母に挨拶できなかったのがすごく悔しかったです。遠いのでなかなか行けません、今年の冬こそは秋田へ行つてしっかり曾祖母に今までの感謝の気持ちを伝えたいです。あと少しで曾祖母が亡くなってから四カ月が経ちます。時間が経つのは本当に早く、家に電話がかかってきたのがまるで昨日のことのように感じます。曾祖母は生前、いつも笑顔で私と接してくれていました。嫌なことがあつてもその笑顔を見るとなんだか大丈夫な気がして、不安が和らぎました。生きているうちに恩返しをすることができなかつたので、これから今よりもっと強く生きて、天国にいる曾祖母に今までの気持ちや、私は大丈夫だよ、と伝わるようにしたいです。

曾祖母の死に直面して、私は改めて周りにいる人を大切にしなければいけないと思いました。日々人に感謝できているか思い返してみると、まだまだ足りないな、と気付きました。人は一人では生きていけません。だからこそ周りの人たちと協力し合っていくことが大事だと思います。日頃から周りの人に感謝の気持ちを伝えるようにしようと思います。たくさん考える機会をくれた曾祖母には感謝しかありません。曾祖母が天国で喜んでくれるように、これから強く生きていきます。

【選評】

審査員長 川越西中学校教諭 中野 由紀子

「川越市少年の主張作文」は、川越市青少年を育てる市民会議・川越市・川越市教育委員会が主催する作文コンクールです。当コンクールは青少年が日常生活の中で考えていること、感じていることを広く社会に訴えることにより、同世代の青少年の意識啓発と、青少年の健全育成に対する大人の理解と関心を高めることをねらいとして、昭和六十二年度から実施しています。

また、最優秀賞・優秀賞の作品は次年度に開催が見込まれる青少年育成埼玉会議等が主催の「青少年の主張大会」に推薦され、当大会の中学生の部最優秀賞受賞者は、さらに独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」への出場候補者として推薦されることとなっています。

歴史と重みのある当コンクールにおいて、今年度は中学生の部に二百八十九編の応募がありました。その中から、審査の結果、十二編の入選作品が決定いたしました。

応募作品のテーマには「環境」「多様性のある社会」「AI」といった、まさしく現代社会における諸問題を青少年の立場から鋭く切り取ったものや、「家族の話」「自分の夢」「いじめについて」等、身近な事柄から自分の意見をまとめたものが多く見られました。その中でも特に入選作品には青少年らしい瑞々しい感性や子供から大人へと成長するこの時期だからこそ感じられる問題意識に加え、「主張」——つまり自分がその文章を通して何を伝えたいのかが明確に書き表されていました。また、世に存在する諸問題に対し、実体験や具体例を添えて主張を行ったり、リフレーミングによって広い視野で捉え直したりすることで、説得力のある作品に仕上がっていました。読者に「読み応え」を与える文章というのは、伝えたいことが一本の柱としてどっしりと通っているものであると改めて感じます。

入選作品の内、上位三作品は次の通りです。

最優秀賞 神山 航河くん 「学校教材」

優秀賞 成島 恒 くん

「変わらないこと、変わること」

優秀賞 増田 波奈さん 「あたりまえ」

最優秀賞の神山くんの「学校教材」は誰もが感じたことのある「学校教材の重さ」を切り口とし、率直な意見をまとめ未来志向による解決策を提示するというものでした。身近な問題を自分なりの解釈で取り上げ、等身大の言葉で表現することで、青少年はもちろん大人の共感を呼ぶ作品となりました。現実への単なる批判で終わらず、未来を生きる青少年として前へ前へと進もうとする意志の強さを感じます。

優秀賞の成島くんの「変わらないこと、変わること」は「認識」というものに焦点を当て、物事は考え方・捉え方次第でいかようにも変わるといいう人間社会の在り方を見つめたものでした。「全て正しく、全て正しくない」——この言葉に本作品の全てが凝縮されていると感じます。論の展開が緻密で、中学生からの鋭い問題提起に、大人である我々も立ち止まり、考えなくてはならないと思わせる作品です。

同じく優秀賞の増田さんの「あたりまえ」は遠い国に生きる子供たちに思いを馳せ、日本に生きる私たちの「あたりまえ」は決して「あたりまえ」でないという世界の現状を考えていったものです。作中のデータ・具体例からは論の根拠を提示するために入念な下調べが行われたことが伺えます。また、問題を深く知るにつれて、どこか遠い国のできごとではなく、自分のこととして捉え直そうとしている姿が印象的でした。

他の入選作品も、青少年が社会を、そして自分自身をどのように捉え、どうしていきたいのか、力強い主張が見られるものが多くあります。青少年の皆さんはこの作文集を通して、同世代の青少年の主張に触れ、自らの考えを深化させていってほしいと思います。

平成から令和へ。新しい時代を切り開いていく青少年は日々さまざまなことを感じ、考えています。彼らの心のうちにある確かな主張を真摯に受け止め、さらによりよい社会を築くために、皆様に「一読いただければ幸いです」。